

## 三月の法話 抄録

## 如来の種

K・Sさんの日記より

釋尼 花伝

戦乱が起きて胸痛む日々ですが、歴史を振り返りますと、その様な状況のこの時こそ人間としての至高の真理の探究であります仏道をきわめることが、人身を救う最勝のあり方と思われまふ。そこで私の師であります、稲津紀三先生の直弟子のK・Sさんの清新な手記(大信海より)をご紹介しますので、まずは皆様のお心でどうぞ直にじっくりとお味わいになってみて下さい。

九月十八日

覚

目覚める

目が覚めるのは、この身が種であるから。如来の種なのでしよう。

種だから、光に会えば、目がさめるのでしよう。

人は如来の種。

こんな暖かい目で見られたら、人は本当に目覚めて、花が咲きそつです。

十月十八日

大信海へ書くように頼まれますと気が

恥ずかしくて、ちょっと困るのですが、先生が「書くことは大事だ」といつもおっしゃるように、私もそう思うので

す。文にすると、自分の思いがはつきりします。この身に寿のいのちを証してゆくために、書かせてもらうことは大切だと思い、光を待ち望んでいる人のためにも、私自身を書いてゆこうと思います。

「人間にとつて幸いなことに、彼の真の自己は仏陀に燃え上がった!」

タゴールのこのことばを読むと、この中に今までに私の歩みのすべてが言い尽くされているようで、思わず、手を合わせてしまいます。

真の自己を仏陀(釈迦如来)に見出した喜びを世の中に伝えていきたいと願っています。

十月二十二日

人身受け難し今已に受く

仏法聞き難し今已に聞く

此の身今生に向かつて度せずんば更に何れの生に向かつてか此の身を度せんと

大衆もろともに、至心に三宝に帰依したてまつる

形あるこの身体をもって生まれた私の上に仏寿を顕わしてゆく。

この形ある私は、消えてしまうのではなく次第にその正体が明らかになつてゆく。

この身は、法の中に消えてゆく、と、そんな気がしていたのです。……あらゆるものが法の中に溶かされていくよ

うな……。ところが、小さな、名前ある私は、如来のいのちに帰依すれば、この寿の命をもって、帰ってくるのである。人の命の大切なわけをここまで来て初めて思われます。

人身を受けて生まれてきたからには、形ある身をもって、形なき仏寿を顕わしてゆくの誰でもの身にとって、一番自然な、嬉しいあり方なのでしょう。

十月三十日

本当に大切なことが心に届けば、煩惱の嵐も静まって、タゴールの言う、嵐の雲のなお上にある静寂な空が広がることでしょう。

名前を持ち、身体ある私には煩惱の嵐が吹き荒れます。

子供に添って行く事は難しい事です。草花でも太陽の暖かさに育てられるのですから、添って行き、はぐくんでゆく他はないのですね。それなのにすぐ

に果を急いでしまいます。それなのにすぐ「必ず煩惱の氷溶け、すなわち菩提の水となる」

「氷多きに水多し、障り多きに徳多し」

この和讃を我が身にも、子供へも頼みとしていきましよう。

私の心が荒れては、子供の氷は溶けるわけはありませんから……。

「帰命無量寿如来」です。

十一月三日

「釈尊をたずねて此身に得るもの」この

題を、この身に受けて思うに、釈迦如来に帰依する心が定まってから、私の中に顕れてきた事に、「誰でも私」と「世に問う思い」があります。

皇女の御夢に見たまいき、金色の聖僧あらわれて、我世を救う願ひあり、しばらく御はらに宿るべし、我これ救世菩薩なり、家西方にありとじて踊りて御口にいらしたもう、はらまれいます菩薩なり。

こうして聖徳太子を受胎したといわれまふが、人は誰でも、この「世を救う願ひ」を託されて生まれてくるのではないかしら、と思えてきます。

私にも、釈尊をたずねてゆくうちに、何の力ももなく、自然に「世を救う願ひ」が沸いてくるのです。

嬉しい事に、その願ひは名前ある小さな私の願ひでなく、誰でも「私」、「私はあなたですよ」と語りかける事のできる「私」の願ひなのです。それ故、力みがいらぬのでしよう。

限りある身体を持つこの私に顕れる誰でも私、その願ひは、生死ある命に苦しむ人を助けて、共に如来道を歩いてゆきたい、と。

他人と私と思う気持がなくなってきたのに気が付きます。誰にでも「私はあなたですよ」と言えそつです。

如来道を歩む私自身を、世の中に向かって行きたいと願っています。